

K E N W A T A N A B E



沈まぬ太陽



30年間、企業の不条理に翻弄されて絶叫に絶えなかつた男
仕事とは、家族とは、人生とは……
苦悩する現代社会に投げかける、壮大なる人間の叙事詩

shizumanu-taiyo.jp
© 2009 東宝映画株式会社

INTRODUCTION



物語は日本が高度経済成長を実現し世界経済の頂点へと上りつめていく時代。巨大組織の中で翻弄されながらも、強い信念と不屈の精神をもって、どんな過酷な状況をも克服していく男、恩地元。『沈まぬ太陽』は、その生き方を通して、人間の尊厳と、飽くなき闘志と再生を描く、壮大なる人間の叙事詩である。

新聞記者という来歴を持ち、常に社会への警鐘を鳴らす作品を発表し続けてきた原作者・山崎豊子自身が映像化を熱望、「この作品の映画化を見るまでは決して死ぬことは出来ない」と言わしめるほどの著者渾身の一作。映像化不可能とまでいわれた、原作の持つスケール観と時代背景を克明に再現するため、製作陣は万全の態勢を整えて臨んだ。そして、原作の刊行から10年の時を経た2009年10月——日本人の魂を揺さぶる感動と慟哭の物語が、遂にその公開を迎える。

日本映画界希有の一大プロジェクトに挑んだのは、錚々たるスタッフ&キャストである。注目のキャストには、今の日本映画を支える最高の顔ぶれが揃った。

主人公・恩地元を演じるのは、「ラストサムライ」「硫黄島からの手紙」など、日本が世界に誇る名優、渡辺謙。世界中が注目するその才能で、恩地という男の不屈の姿をスクリーンに刻み付ける。恩地の同僚ながらも、激しい上昇志向ゆえに対立することとなる行天四郎には、実力派俳優として観客の心をとらえる三浦友和。恩地に心を寄せながらも、行天の愛人となる三井美樹には、映像・舞台と、常に若手女優のトップを走る、松雪泰子。恩地の妻・りつ子には、確かな演技力で数々の日本映画を支える、鈴木京香。さらに、政府より巨大企業の再建を託され全精力を注ぐ国見正之を、石坂浩二が滋味あふれる演技で引き締めている。その他、主演級クラスの豪華俳優陣が、数々のシーンを彩り、まさにオールスターキャストと呼ぶに相応しい顔ぶれが、本作で一堂に会した。

監督は、日本映画における冒険活劇の金字塔「ホワイトアウト」を手がけた、若松朗。念願でもあった原作の映画化に全身全霊を込めて、9年ぶりとなる大作映画の演出に采配を振っている。

脚本には、「陽はまた昇る」で白熱の企業ドラマを手掛けた俊英・西岡琢也。加えて、音楽・住友紀人（「ホワイトアウト」「アンフェア」）、撮影・長沼六男（「武士の一分」「たそがれ清兵衛」）、照明・中須岳士（「武士の一分」「母べえ」）、美術・小川富美夫（「おくりびと」「椿三十郎」）、録音・郡弘道（「それでもボクはやってない」「子ぎつねヘレン」）ら、最高の技術スタッフが集結した。

昭和30年代から、60年代という、終戦から復興を遂げた日本が経済大国へと急成長した激動の時代。物語は、未曾有の航空事故から、政界を巻き込んだ波乱の展開を迎え、日本のみならず、中東、アフリカ、アメリカへと舞台を移し、国家と組織の中で生きるすべての人びとがかかえる葛藤を壮大なスケールで描いていく。主人公・恩地元が人生の長い旅路の果てに見出す“生きることへの願い”は、必ずや観客の魂を揺さぶることだろう。世代を超え、時を越え、語り継がれるべき感動と慟哭の熱い人間ドラマが、いま3時間を超える大巨編としてスクリーンに登場する。

本年度最高の話題作『沈まぬ太陽』に、どうぞご期待ください。

『沈まぬ太陽』の映像化には、長い険しい道のりがありました。この度、若松監督の下、渡辺謙さんをはじめ、個性的なキャスト、選りすぐりのスタッフが、映画製作に勇気を持って挑戦して下さいました。原作者としてほんとうに嬉しく、完成が今から待たれます。主人公・恩地元は、不条理を糾したゆえに周囲から徹底的に疎まれるという状況の中、不屈の精神で立ち向かう清冽な企業人です。素漠とした希望の見えない現代において、映画『沈まぬ太陽』が荘厳な光とし輝き、明日を約束してくれることを、切に切に祈ります。

原作 山崎豊子

僕は今回、恩地の役を射止めるために、山崎先生に直接アプローチしたんです。僕の中で「いつか絶対に演じたい」と最も強く思い続けてきたのが、恩地元という人物だったからです。恩地は大変な辛酸を舐めながらも、会社を辞めようとはしない。それはなぜなのか。個人と組織、自分と会社って、一体全体、何なのか。家族とか人生とか運命とは何ものなのか。この作品を包含するエッセンスは普遍的で、かつ今こそ問われるべきものです。男女問わずあらゆる世代の人たちに強く訴える極めて骨太な作品、それが『沈まぬ太陽』なのです。

主演 渡辺謙

INFORMATION

1巻400ページ超、全5巻の大河小説『沈まぬ太陽』の映画化にあたり、十二分にその世界観を表現するために日本映画では破格の3時間22分の映像世界を作り上げました。観客のみなさまに、この超大作を余すことなく堪能いただくために、10分間の休憩時間を設けます。黒澤明「七人の侍」「赤ひげ」など映画史に残る名作と同じくインターミッション(途中休憩)ありの上映体制でお客様をお迎えいたします。

10.24 SAT 東宝系公開

劇場内での撮影の
撮影・録音は行いません
www.eiga.com
0120-550008

信念は決して消えない。激動の昭和をかけぬけた男の熱き生き方とは…



利根川・総理大臣
(加藤 剛)

大事故を起こした国民航空次期社長に世間が注目を浴びる中、監督官庁の長である運輸大臣ではなく、総理自ら後任人事を手がけることで官邸の力を誇示しようとする。



堂本・国航社長
(柴 俊夫)

労務担当役員として冷徹に組合交渉を行う。恩地がカラチ転勤後に行天を引き立て、組合との分断を図る。労務対策の手順を買われ、国民航空初のプロパーの社長に就任。国航創立35周年をトップの立場で迎える中、墜落事故が発生する。



八馬・国航取締役
(西村雅彦)

堂本の右腕として労務対策に当たる。カラチ勤務の恩地に組合から離れ会社に一種詫言状を書くように命令するが拒絶され激昂する。堂本とともに出世し、海外のホテル事業を手がける「国航商事」の会長まで上り詰める。



1962
(昭和37年)



行天四郎
(三浦友和)

労働組合副委員長として恩地と共に闘ったが、エリートコースと引き換えに組合の分裂を画策する。社内情勢を見る目に長け、事故後は新体制のもとで常務に昇進。己の出世と企業利益のためには、手段を選ばない。



三井美樹
(松雪泰子)

国民航空のステewardess。本来は、墜落した事故機に搭乗しているはずが、後輩にフライトを交代してもらい難を逃れた。愛人関係の行天に利用されることもあるが、組織の中で懸命に生き残ろうとする行天に理解を示す唯一の存在である。



竹丸・副総理
(小林稔侍)

利根川内閣の副総理にして民自党の実力者。政界、財界に広い人脈と影響力を持ち、総理の右腕として利根川の長期政権を支える。



桧山・国航社長
(神山 繁)

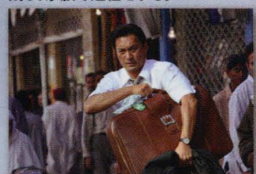
運輸官僚からの天下り社長。組合側との団体交渉では妥協点を提示できず、恩地委員長からスト権を突きつけられ動揺する。恩地の立場を理解しカラチ勤務から2年で戻す約束するが、反故にする。

70年代

10年の左遷を終え、帰国。
10年以上に及ぶ海外僻地勤務を終え漸く本社に戻った恩地だが、実質、仕事の無い窓際の部署へ追いやられる。

懲罰人事で海外へ——10年間、僻地で奔走。

■パキスタン・カラチへ
全く畑違いとなる海外僻地の支店業務＝パキスタン・カラチへの勤務を命じられる。老いた母親(草苗光子)を残し、家族で赴任をする。



労働組合委員長として職場改善を訴える。
恩地 元(渡辺 謙)は国民航空の労働組合委員長として副委員長・行天四郎(三浦友和)とともに職場環境の改善と「空の安全」を社に訴える。難航する交渉の結果、要求を勝ち取る!

■イラン・テヘランへ
海外僻地勤務は2年という内規を無視され、就航準備が始まったばかりのイラン・テヘランへの勤務を命じられる。妻・りつ子(鈴木京香)は恩地と離れ、義母の待つ日本へ帰国。



■そして、ケニア・ナイロビへ
就航路線もないケニアへ駐在員としての辞令が、納得の出来ない恩地であったが、苦境に耐える本社の仲間たちのことを思い、単身・ナイロビへ、日本に戻った家族は帰国の目処が立たない恩地を待ち侘び、空中分解寸前に…



1986
(昭和62年)

■ニューヨークへ
会長の命を受け不正経理疑惑を調査するためニューヨークへ。しかし政・官・企業に広がる漆黒の闇が、恩地を更なる苦境へと引きずり込む…



新会長との出会い、国航再建に挑む。総理の三顧の礼により就任した国見会長(石坂浩二)は、恩地を新設した会長室の室長に抜擢する。



ジャンボ機墜落事故発生。遺族係として苦悩する。
史上最悪のジャンボ機墜落事故が発生。急遽、遺族係を命じられ、最愛の人を突然に失うという遺族たちの壮絶な現実を前に、恩地は苦悩する。



国見正之
(石坂浩二)

元・関西紡績会長。労務問題に辣腕を振った実績を買われ、首相の利根川直々の指名で国民航空の会長に就任。事故によって信用の失墜した会社の再建に尽力する。問題解決のため「会長室」を新設、恩地を登用して社内改革をすすめる。

STORY

昭和30年代—。巨大企業・国民航空社員の労働組合委員長、恩地 元(渡辺 謙)。組合委員長として職場環境の改善に取り組んだ結果、恩地を待っていたのは会社からの海外赴任辞令だった。恩地はパキスタン、イラン、そして路線の就航もないケニアへと赴任。会社は帰国をちらつかせ、恩地に組合からの脱退を迫る一方で、露骨に組合の分断を図っていた。そんな中、共に闘った同期の行天四郎(三浦友和)は早々に組合を抜け、エリートコースを歩みはじめる。同僚でありながら行天の愛人の国際線客室乗務員・三井美樹(松雪泰子)は、対照的な人生を歩む2人を冷静に見続ける。

行天の裏切り、更に妻・りつ子(鈴木京香)ら家族との長年にわたる離れ離れの生活—。焦燥感と孤独とが、恩地を次第に追いつめていく。十年におよぶ僻地での不遇な海外勤務に耐え、本社へ復帰を果たしたものの、恩地への待遇が変わることはなかった。逆境の日々のなか、ついに「その日」はおとずれる。航空史上最大のジャンボ機墜落事故。想像を絶する犠牲者の数—。遺体の検視、事故原因の究明、補償交渉。救援隊として現地に赴き、遺族係を命ぜられた恩地は、誰も経験をしたことがない悲劇に直面し、苦悩する。墜落は、起こるべくして起きた事故だったのか。

恩地 元(渡辺 謙)

労働組合委員長として、過酷な労働条件は空の事故にも繋がりがねない。待遇改善を強硬に訴えた。そのため、懲罰人事ともいえる海外の僻地へ追いやられる。以来10年、流刑のごとく各地を転々とする。帰国後に起きた国航機墜落事故では遺族係として奔走する。事故後、会長に就任した国見に、かつての労働組合をまとめた手帳を買われ「会長室」室長に任命される。

政府は組織の建て直しを図るべく、新会長に国見正之(石坂浩二)の就任を要請。恩地は新設された会長室の室長に抜擢される。「きみの力を借りたい」。国見の真摯な説得が恩地を動かした。しかし、それは終わらなき暗闘の始まりだった……。



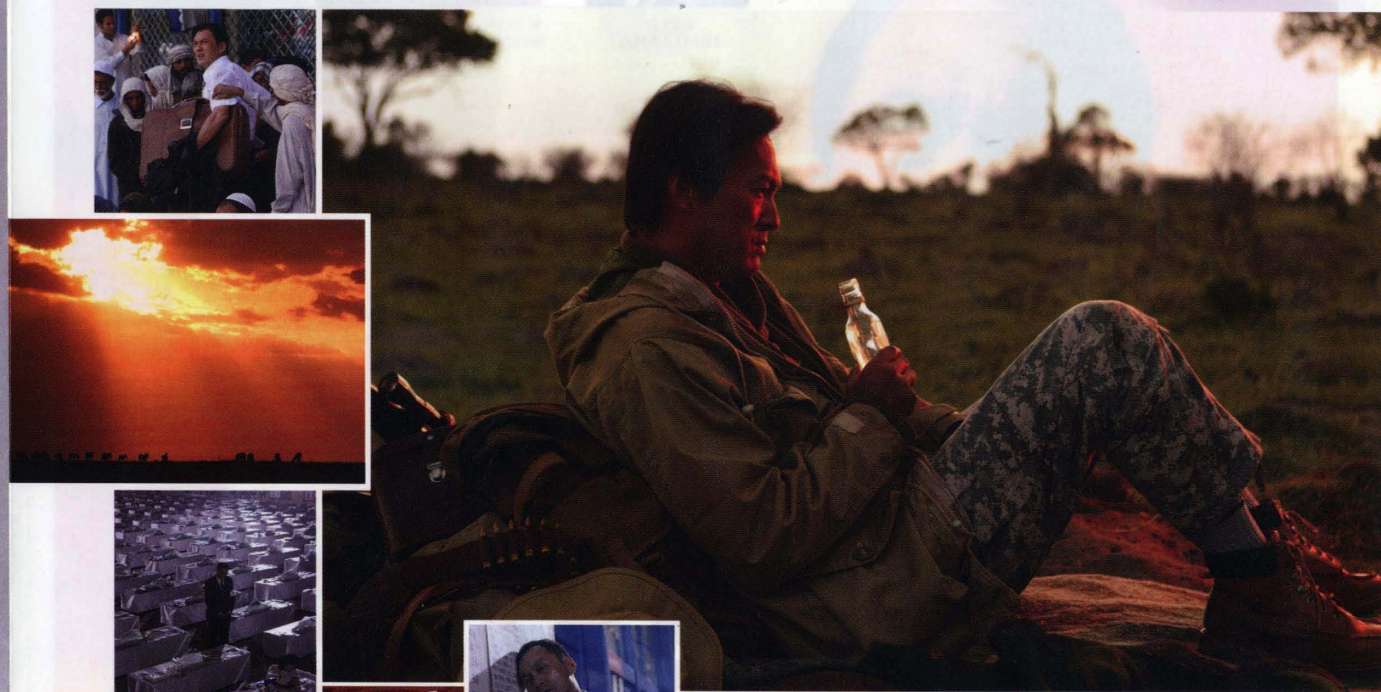
恩地りつ子
(鈴木京香)

恩地の妻。単身で海外赴任する元の留守中、ふたりの子供と元の母の面倒を見る。元が会社から不当な扱いを受けている時、彼女もまたふたりの子供たちを支えながら、夫を排擠中傷する世間の声と闘っていた。

「白い巨塔」「華麗なる一族」「不毛地帯」「大地の子」…

人間の本质を世に問う長編小説を次々に手がける国民的作家・山崎豊子。数々の大ベストセラー原作の中で、未だ映像化されていない最高傑作『沈まぬ太陽』が日本映画史上最大のスケールで、

いよいよ10月、スクリーンに登場。



恩地の戦いは果てしなく続く……